

『かげろふの日記』解釈論

——「返し、いと古めきたり」「例のつれなうなりぬ」——

森 田 兼 吉

「かげろふの日記」の天曆八年（九五四）十月の記事として、道綱母と兼家との贈答歌が次に記されている。二人の結婚はその年の秋七月か八月かであるから、まだ新婚早々の頃であった。以下本文の引用は日本古典文学全集本による。傍線は筆者が施した。

かくて、十月になりぬ。ここに物忌なるほどを、心もとなげにいひつつ、

なげきつつかへす衣の露けきにいと空さへしぐれそふらむ

返し、いと古めきたり。

思ひあらば干なましものをいかでかはかへす衣のたれも濡らむ

とあるほどに、わがたのもしき人、陸奥国へ出で立ちぬ。

傍線部分の解釈は、たとえば『全集』の「返事——それは、まったく変わりばえのしない返歌だった」という現代語訳でほとんど問題がないだろう。しかし、道綱母が自作の返歌になぜこのような評

語をつけたのかとなると、明確ではない。道綱母の歌もそれを導き出した兼家の歌も、『古今集』恋二の小野小町の、

いとせめて恋しきときはむばたまの夜の衣を返してぞきる

よつてゐる。道綱母の歌は、兼家のよつた小町の歌をそのまま使った上に、「思ひ」に「火」をかけて構成されている。そうした技巧とこの評語とが関係のあることまでは確かなのだが、小町の歌によつたり、「思ひ」に「火」をかけたたりすることが、そんなに古くなく、陳腐なのだろうか。古歌によつて詠作することは普通のことである。「思ひ」に「火」をかけるのも『古今集』や『後撰集』の歌人が好んだ技法であり、常套的ではあるが、むしろ和歌の約束事のようなものであって、当時の人々にとつては、陳腐だと弁解する要のあるものではなかったはずである。

こうした疑問への答えとして、今日もつとも注目されるのは「蜻蛉日記注解」の説であり、それを要約した形の『全集』の説である。

「注解」がこの評語を、「贈答が取り交わされた時の作者の実感をそのまま述べていると見るよりも、蜻蛉日記執筆に当つて「思ひあらば」の歌に作者が加えた評語というべきであり、その意味で一種

「かげろふの日記」解釈論——「返し、いと古めきたり」「例のつれなうなりぬ」——

の注記的表現であるといえよう」とされたのは、従うべきであろう。さらに「注解」は、「兼家から「歎きつゝ」の歌をもらったその折、彼女は複雑な胸中の精一杯の表現として、「思ひあらば」の歌を返したのであったが、こうした陳腐な言い方では尽くせない気持ちに、むしろ本当に表現したい自らの心の真実のあったことを、蜻蛉日記を書き綴ってゆくなかで、いまやはっきりと再認識したからこそ、自己の返歌に「いとふるめきたり」と書き加えずにはいられなかったのではなからうか」と説く。しかしそれでは、複雑な胸中とはどのようなものであったのだろうか。精一杯に表現しようとして歌ったのであるとすれば、たとい尽くしえなかったとしても、歌からその一端はうかがえるはずであらう。

「思ひあらば」の歌で印象的なのは、その素直な詠み口と、そこに漂う甘さである。物忌で逢えないのはほんのわずかな期間であろう。それなのに兼家は、歎き、夜の衣を裏返しに着て寝たという。小町の歌に描かれているように、夜着を裏返しに寝れば夢で思う人に逢えるという。せめて夢でもあなたに逢いたい。それを急いで裏返しに着た衣がじかに逢えない悲しみの涙で濡れ、おまけに時雨までが……と兼家は歌っているのである。新婚の夫の甘いささやきだが、どこまで真実かはむろん保証の限りではない。その意味では女の側から切り返しやすい歌なのだが、このとき道綱母はそうはしなかった。「思ひあらば干なましものを」という上の二句は、濡れてるなどというところを見ると、あなたに思いの火が本当にあるの？ 変ねえ」という切り返しを予想させるのだが、意外にも「いなかではかへす衣のたれも濡るらむ」という形で歌は終息する。

「たれも」とある以上、道綱母も兼家に夢で逢いたくて衣を裏返して寝たというのであり、その衣が兼家恋しさの涙に濡れたのである。あなたにもわたくしにも、思いの火は燃えさかっているはずなのに、どうしてなのかしら？ と、妻も甘くささやき返しているのである。兼家の自分への愛を自分の愛情と同等に評価し、肯定しているところに、この歌の特色がある。複雑な胸中を精一杯表現しようとして尽くせなかった、という気配のまったく感じられない歌のように私には思える。

考えてみれば、結婚から道綱が誕生する頃までの約一年間は、道綱母にとってそれなりに充実した愛の日々だったはずである。父の陸奥国への出立の記事の中に「人はまだ見馴るといふべきほどにもあらず」と書き、町小路の女の零落後兼家に贈った長歌の中で、結婚当初を回想して、「見そめし秋は 言の葉の 薄き色にや うつろふと 嘆きのしたに 嘆かれき」と歌ってはいても、町小路の女の出現までは、兼家は作者に誠実であった。道綱の出産前後は「そのほどの心ばへはしも、ねんごろなるやうなりけり」と作者も認めている。父倫寧は赴任に際し「君をのみたのむたび」だとして、娘のことを切々と兼家に託し、兼家も、

われをのみたのむといへばゆくすゑの松の契りも来てこそは見
め

という歌を贈り、まかせてくださいと、見えを切らんばかりである。兼家の性格からしても、父の赴任前後、悲しみに暮れる新妻をいたわりつくしんだことは、間違いないまい。また「後拾遺集」恋四には次のような贈答歌も見える。（「後拾遺和歌集総索引」本

文・校異・索引・研究」による)

女のもとにつかはしける

わが恋は春の山べにつけてしをもえいで、君がめにもみえなん

(八二二)

かへし

大納言道綱母

春の野につくるおもひのあまたあればいづれを君がもゆるとか

見ん

(八二三)

おなじ女に

入道撰政

春日野はなのみなりけり我身こそとぶひならねどもえ渡りけれ

(八二四)

「後拾遺集」の中で読めば、藤本一恵氏の『後拾遺和歌集全訳注』のように「歌の内容からすれば、求婚、求愛の歌のようにおもわれる」というのが自然だが、兼家の最初の求婚の歌はほととぎすの頃のものであり、それから結婚までに春は含まれない。おそらくは結婚の翌年天曆九年の春の詠作であろう。奈良の春日大社参詣の折の詠であろうか。兼家の熱愛ぶりがうかがわれる歌である。

もちろん、いくら兼家に愛されていたとしても、兼家にはすでに時姫という妻があり、子ども(道隆)も生まれていた。一夫多妻の許される社会状況下では、彼女が長歌で詠じたように、男の愛心への不安は常につきまとい、幸福にひたりきることではできなかったであろう。しかしそれは漠然とした不安であり、当時の女性のほとんど誰しもが経験する性質のものであった。「思ひあらば」と詠んだ時点では、まだ「かげろふの日記」の根幹をなすような、兼家への絶対不信、かげろふのようにはかない身の上という認識は、成立し

ていなかったと見てよい。この歌で道綱母は、心の奥底にあったであろう不安を表面に出すこととはしない。兼家同様道綱母にしたところで衣を返して寝たかどうかは疑問なのだが、兼家のことばに乗ってみせ、甘えているのである。そしてその甘さこそが「返し、いと古めきたり」と道綱母に書かせた原因ではなかったらうか。

「かげろふの日記」は、他の女流日記文学の多くがそうであるように、回想の記であった。この作品がいつの時点で執筆され初めたのかはさだかではない。私は中巻末あたりまでがまず書かれたという立場をとっているのだが、どの説によったところで「思ひあらば」の贈答前後は執筆時から十数年以上前であることは確かである。

一般に日記文学の作者がわが身の上を綴ろうとしたとき、回想によって魅らせた出来事は、体験時のものとは微妙に、あるいは大きく異っているのが普通であろう。記憶を何度も何度も反芻しているうちに、体験時のものとはまったく異ったものに変形してしまうこともあるし、ある部分だけが強調された形で思い起こされ他の部分は忘れられて、体験時の心理的なバランスをくずした形で再現されることもある。ある出来事に対する解釈が年を経るに従って変化し、それでいて、もともと自分はそう考えていたのだと、無意識のうちに思い込んでしまっている場合も少くはないだろう。かなり忠実に思い出せたとしても、回想している現在の心理的フィルターを通してしか見ることができてはいない、といつてよいだろう。そうした記憶を大きな材料として作者は作品を綴っていくのだが、この不安定な資料の中で異質の存在が和歌である。和歌は歌反故などの形で保存される機会が多いし、和歌を大切にする当時の人達は自作

「かげろふの日記」解釈論——「返し、いと古めきたり」「例のつれなうなり」——

の歌をよく覚えてもいた。そして和歌は、その和歌それ自体だけに
ついていう限り、たとい一、二字の字句が誤って再生されたとして
も、詠まれたときそのままのものであり、時間の経過によつても執
筆時の作者の心理によつても、変形されたり、フィルターをかけら
れたりすることは、きわめて少ないのである。石原昭平¹⁾氏は「……
作品執筆の核となる和歌こそは、まぎれもない往時の生々しい感情
体験である」と述べておられる。そこで、この和歌を軸としてその
詠まれた前後の出来事が回想されることも多いのだが、そこで回想
されたものは、前述のとおり、体験時現在のものとは違っているか
もしれないのである。時には、和歌の詠作時とは異なる時点のものが
回想され、誤つて和歌と結びついてしまうようなことも、ないわけ
ではないだろう。たとえば、『更級日記』の次のような記事である。
同じく日本古典文学全集本によつて掲げる。

このつごもりの日、谷の方なる木の上に、ほととぎす、かしが
ましく鳴いたり。

都には待つらむものをほととぎすけふ日ねもすに鳴きくら
すかな

などのみがめつつ、もろともにある人、「ただいま京にも聞き
たらむ人あらむや。かくてながむらむとは思ひおこする人あら
むや」などいひて、

山ふかくたれか思ひはおこすべき月見る人は多からめども
といへば、

深き夜に月見るをりは知らねどもまづ山里ぞおもひやらる
る

孝標女十八歳の頃の東山での日々の一場面であるが、月のないつ
ごもりの日と、後半の月夜を思わせる歌とが合わないことはよく知
られている。作者が東山へ移つたのは「四月つごもりがた」だとい
い、「都には」の歌はその内容から都ではまだほととぎすが忍び音
にしか鳴かない四月の内ものとして知られ、「つごもりの日」を疑つ
たとしても、とうてい月の美しい頃の詠とは信じがたい。後の二首
の歌の月を实景と見ないで解そうとする試みもあるけれども、「都
には」の歌と他の二首とはもともと詠まれた日を異にするものだ
つたのが、誤つて同日のものとして回想されたと見るのが妥当であ
らう。日記文学の場合、和歌とその詠作事情を伝える文章との間に
は作者の意識していない、むしろ往々にしてあるのである。

回想によつてみずからの生の軌跡を綴るとき、もう一つ興味深い
ことは、いつもそこに二人の自分が存在しているという事実であ
る。回想によつて甦つた場面での自分は、その場その場に精一杯対
処している自分であり、未来のことはむろん知りうるはずもない。
ところが、過去の一コマ一コマを回想し、綴っている自分は、過去
のあの状況の中の自分に容易に同化し、感情にひたきることがで
きる一方、その先がどうなるかがはつきり見えてしまっている、覚
めた目の持主でもあるのである。問題の「返し、いと古めきたり」
に立ち返つていへば、「思ひあらば」を詠んだ道綱母はとにもかく
にも兼家の愛を信じようとし、甘えてもいる。一方、その歌を作品
の中に組み込もうとしている道綱母は、すでに兼家の心変わりを見
てしまっている。あのとき兼家に甘えていた自分がその先味わわか
れるはずの苦悩をすでに十分になめ尽くしている。あの頃の道綱母

は「なげきつつかへす衣の」という兼家の歌に素直に「思ひあらば」と返すことができたのだが、執筆時の道綱母には兼家の歌がまず信じられないのであろう。しかし、「思ひあらば」の歌は敢然とそこに存在する。そこで「返し、いと古めきたり」という注記が必要になったのであろう。わたくしの返歌は常套的な古い技法にそのままよりかかって作られたもので、形式的な歌であり、自分の心の真底などを詠み込んだものではなかったのだ。——おそらく、道綱母はこのように言っているのであろう。そして、彼女の歌がそのようなものであるならば、兼家の「なげきつつ」の贈歌も、きわめて「古めき」たるものということになる。嘆き・衣を裏返して寝る・露けき（涙に濡れる衣）・時雨、兼家の歌が常套句・類型、だけから成り立っていることは誰の目にも明らかで、となればそこには真情など詠み込まれてはいないのだ、と道綱母は説き明かしてみせたこととなるのである。「返し、いと古めきたり」は、執筆時現在の道綱母の心情とおよそかけはなれた「思ひあらば」の贈答を「かげろふの日記」の世界に組み込むために、必須で、しかも効果的な注記だったのである。

二

求婚から結婚の成立までの数カ月間の贈答歌が、結婚成立三日めのものであっても含めて十四首記されているのに対して、町小路の女の出現以前、結婚成立後翌年八月までおよそ一年間の贈答歌は十一首しか「日記」に記されてはいない。その中には兼家と倫寧の贈答歌一組が含まれているから、作者と兼家の贈答は九首、作者の歌だ

「かげろふの日記」解釈論——「返し、いと古めきたり」「例のつれなうなりぬ」——

けが記されているところが三回あるから、歌の贈答の行われたのは六場面ということになる。これはきわめて少ない数字というべきであらう。結婚当初の兼家がまだ誠実であったしあわせの一年間の和歌の贈答がこれほど少ないはずはない。守屋省吾氏³⁾は、「かげろふの日記」上巻の素材となったものとして、兼家の要請によって成立した「道綱母集」を想定しておられる。その「道綱母集」には、結婚後一年間の歌が、前掲の「後拾遺集」八二二〜八二四をも含めてかなり多く載せられていたのではないだろうか。かげろふのようなあるかなきかのはかない身の上を描くの、この時期の歌をそう多く収録する意味はない。かなりの部分があえて捨てられたのではなかったろうか。記されている歌も「なでしこの花にぞ露はたまらざりける」「消えかへり露もまだ干ぬ袖の上」「なはたのめとやもるをみるみる」「横川の水に降る雪もわがごと消えてものは思はず」と、不安や悲しみをうったえる、しかしそれだけにきわめて類型的なものばかりなのだ。しかし、そのような中で、兼家への愛を甘く歌った「思ひあらば」の歌を、注記を書き入れながらも採ったのは興味深い。

「かげろふの日記」の上巻に、幸福の記とでもいいたい明るい記事や兼家との愛情の交歓を語る記事のかなり存することは、しばしば論議の対象となってきた。それらは、原資料を取捨選択して日記を執筆する際、原資料が棄却されず、あるいは完全には拭いきれないままに残存したものか、「道綱母集」の草稿が上巻の構成執筆上骨核的存在として包摂されたための現象なのか、それともあるいは、幸福な事象が「蜻蛉日記」の中に位置を占めたとき、それらはその素

材的体験に立ち向かう作者の厳しい姿勢によって矯正され、かえって彼女のはかない身の上をいっそう具体化する」という、一種の文学的な営為として位置づけるべきものなのか。その一々について詳しく考察していくいとまは今はないが、見落してはならないことは、日記執筆に際し、当然素材の取捨選択を行ったにもかかわらず、作者が幸福な過去の生活の思い出には寛容であり、それを積極的に作品に取り入れたという事実である。町小路の女の零落の記事の後にそれまでの日々の縮約的な長歌の贈答がある。その後、日本古典文学全集の十三節以降についてこうした幸福の記事を掲げ、その記事の分量を全集本の行数で示してみよう。

章明親王との交歓

一一六行

兼家の発病と兼家邸への見舞

八三行

賀茂の祭とあやめの節会見物

二三行

登子との和歌の贈答

七八行

初瀬詣の帰途宇治で兼家が出迎える

六一行

この他に母の死に臨んでの兼家の思いやりを示す記事も指摘されているが、長い母の死にかかわる記事(一一二行)の一部に兼家の思いやりが記されているので行数は数えにくく、一応ここでは除外した。また行数は全集本の節を単位として数えたので、最後の項の宇治での出迎えの段の量など若干問題もあろうが、目安としてはこれで十分であろう。母の死を除いても都合三六一行、十三節からの上巻の行数は七五五行(上巻全体では一一二〇行)であるから、明るい記事、幸福な記事がいかに多いかがわかる。これだけの記事が、原資料にあったからとか、完全に拭いきれないままに残存した

とかいった消極的な姿勢で書かれたとは信じがたいのである。では、積極的に取り込んだとして、それは、はかない身の上をいっそう具体化させ、きわだたせるための文学的営為だったのであろうか。

だがそれにしても、あまりにも明るい記事の量が多く、不幸な身の上をうったえる記事とのバランスを逸しているといわねばならないだろう。そこで考えられることは、作者がその一つ一つの回想をとても大切にしている事実であろう。たとい人にもあらぬ身の上を描くには不適當なことであっても、それは彼女にとつてはかけがえのない日々だったのであり、捨て去るにはしのびがたかったのではないだろうか。主題よりもそうした日々の回想の方を大切に、「かげろふの日記」は書かれたように思われる。そうした作者の態度は兼家の発病の記事によく表われている。

康保三年(九六六)三月ばかり、道綱母の家を訪れていた兼家は発病し、本邸に戻つて加療することになる。そして病いがようやく癒えようとするある夜、道綱母は兼家に請われ、迎えの車に乗って兼家邸に行き、精進落とりの魚を一箱に食べて一泊する。それが彼女が生涯の中で兼家邸で過ごした唯一の夜であった。その間の描写には道綱母の兼家に対するあふれんばかりの愛情が表現されていると同時に、兼家の道綱母に対するこまやかな愛情が表現されていることも確かである。

……さし離れたる廊のかたに、いとようとりなししつらひて、端に待ち臥したりけり。火ともしたる、かい消たせて降りたれば、いと暗うて、入らむかたも知らねば、「あやし、ここにぞある」とて、手を取りて導く。「など、かう久しうはありつる、

とて、日ごろありつるやう、くづし語らひて、とばかりあるに、「火ともしつけよ。いと暗し。さらにうしろめたなうはおぼしそ」とて、屏風のうしろに、ほのかにともしたり。……といった文には結婚十三年めの男女のことは思えないほどの甘くみずみずしい情感が漂っている。翌日、引き留められて昼にもなつて彼女が帰るときの、

…「いつか、御ありきは」などいふほどに、涙うきにけり。

「いと心もとなければ、明日明後日のほどばかりにはまゐりなむ」とて、いとさうさうしげなる気色なり。すこし引き出でて、牛かくるほどに見通せば、ありつるところに帰りて、見おこせて、つくづくとあるを見つつ引き出づれば、心にもあらで、かへりみのみぞせらるるかし。

という描写も、別れのつらさが切実に出ている。鈴木一雄氏は、『和泉式部日記』の叙述の特色として氏の説かれた超越的視点の萌芽が『かげろふの日記』に見られることを指摘しておられるが、兼家発病の段はそうした手法の見られるところであり、作者の心情と兼家の心情が時として重なって記されることのある段であった。もちろん「こうした非日常的、反社会的な密会ともいふべき場ではないか、彼女は兼家との愛の悦びを純粹に味わえなかつたのである」（全集の鑑賞）という指摘は正しい。執筆時の作者には、そのあたりはわかっていたらうし、上巻が中巻とはほぼ同じ時期に書かれたとするならば、自分が兼家の本邸に正妻格として入れられることはついになく、兼家邸で過ごせたこれがただ一度きりの夜であったことは、いたいほどに認識していた。作者の家で兼家が侍女達に

「ここにはいかに（道綱母ヲ）思ひきこえたりとか見る」と自信ありげにいっていても、ひたむきな愛情を自分に向かつてあらわしていたとしても、執筆時の作者に兼家が信じられなかったことは確かである。にもかかわらず、道綱母はそのように位置づけてここを描いてはいない。あのときのせっぱつまつたような甘さを再現することにひたすらつとめるのである。この部分、和歌は、道綱母が家に戻つてからの二人の贈答歌二首だけで、散文が主体である。『かげろふの日記』執筆の資料として想定される『道綱母集』や和歌資料にこうした詳細な散文があつたとは考えられず、『日記』執筆時の文章であつた。人にもあらぬ身の上、かげろふのようなはかない生活を書こうとしながら、作者はなお自己の幸福な日々をも書くのである。

幸福の記と対極をなす町小路の女関係の記述の中で、その零落を記す道綱母の憎悪の激しき、わけても、その生んだ子どもまでが死んでしまったことを述べた後での、

…にはかにかくなりぬれば、いかなるこちかはしけむ。わが思ふにはいますこしうちまさりて嘆くらむと思ふに、いまだ胸はあきたる。

という思いのすさまじさはよく知られている。だがこれは、町小路の女の存在によって苦しめられ、痛めつけられて、すっかり意地悪くなつていた心の所為で、常軌を逸したものであつたことを、執筆時の作者がはっきり認識していたことは、こうした記述をするにあつてまず書かれた「人情かりし心思ひしやうは」という、それまで作中にあまり使われていなかった過去の助動詞「き」を用いた句

の存在によってよくわかる。常軌を逸した悪意にしても、主題とは外れる甘い回想にしても、ありのままに書こうという作者の姿勢がうかがわれるのである。

ところで兼家の病いの記事は、

やうやう例のやうになりもてゆけば、例のほどに通ふ。

で結ばれる。「例のほどに通ふ」とはどういうことか。「これまで兼家が通って来ていた日数の間隔でもって」（新注釈）通うのではあるが、その間隔をあまり途絶えがちなものとして理解するのは、この前後二人の仲がうまくいっているときであり、行き過ぎではないだろうか。「返し、いと古めきたり」のような執筆時の心情から発せられた評語による操作や、記事の取捨選択、さらには幸福な記事の続いたあとには不幸な思いを述べて軌道修正をはかるようなことはある。しかし、幸福な日々を描いた記事は基本的には幸福の記事の論理で読んでよいように思われる。

三

前裁の花いろいろに咲き乱れたるを見やりて、臥しながらかくぞいはるる。かたみに恨むるさまのことどもあるべし。

ももくきに乱れて見ゆる花の色はただ白露のおくるなるべし。

とうちいひたれば、かくいふ。

みのあきを思ひ乱るる花のうへの露のころはいへばさならり

などいひて、例のつれなうなりぬ。寝待ちの月の山の端出づる

ほどに、出でむとする気色あり。さらでもありぬべき夜かなと思ふ気色や見えけむ、「とまりぬべきことあらは」などいへど、さしもおぼえねば、

いかがせむ山の端にだにとどまらで心も空に出でむ月をば返し、

ひさかたの空に心の出づといへば影はそこにもとまるべきかな

とて、とどまりにけり。

天徳元年（九五七）秋、咲き乱れる前裁の花に二人は横になりながら目をやっている。おたがい不満に思うことがあったのであろう、というから、兼家の方にも言い分のあったことを、道綱母は認めている。そんな中での贈答であるが、その歌の後の「例のつれなうなりぬ」とはどのような意味だろうか。

「なりぬ」は、書陵部本・彰考館本等「世ふ」であり、「注解」が整理して示しているように、「なりぬ」の他に「よふけて」「よふけぬ」「ふせり」「思ふ」という改訂案もある。「世」を「世」の誤写、「ふ」を「奴」の草体に「婦」の草体を誤写したものと見て「なりぬ」と改訂する説が今日多く行われており、従うべきであろう。「つれなうなりぬ」の本文での現代語訳を諸注釈書で見ると、

• いつものように冷やかになつてしまった。（全講）

• またしても冷やかになつた。（全注釈）

• 例によってよそよそしく相對する結果になつたのであつた。（注解）

・またしてもよそよそしくなりました。

(全集・蜻蛉日記解釈大成)

・いつものとおりよそよそしくなりました。

(対訳日本古典新書)

・またしてもすげなくなりました。

(集成)

とほぼ共通した理解であり、「ふせり」の文の「大系」、「夜ふけて」の本文の「全評解」も「つれなうなりぬ」の部分の解釈は基本的にはこれらと同じである。「臥せり」の本文の「新注釈」、「よふけぬ」の本文の「抄」(三宅清氏)の訳はニュアンスや理解が異なるので掲げておく。

・(あの人は)冷やかにさっさと寝床にはいつてしまった。

(新注釈)

・例のようにとりあわぬ様子で夜も何となしに更けた。

(抄)

また「なりぬ」の本文でも「つれなうなりぬ」の主語・主格となると、「全注釈」は兼家、「全集」は兼家と作者との二人の態度とし、「ふせり」の本文だが、「大系」は、村田春海の、

日記中巻に「岩木のごとして明かしつればつとめて物もいはで帰りぬ」といへるさまなるべし。

という説を引いて、道綱母を主語と考えているようであり、説が分かれるが、それはしばらくおく。今まず問題にしたいのは、「つれなう」が「冷やかに」とか「よそよそしく」とか訳せるかどうか、ということである。

まず場面から考えていこう。

天徳元年のこの記事は、町小路の女の出産と、相撲の頃町小路

「かげろふの日記」解釈論―「返し、いと古めきたり」「例のつれなうなりぬ」―

の女の頼んで来た兼家のための縫物を突き返した記事とに続いている。町小路の女の零落を記したくだりに、「かのめでたきところには、子産みてしより、すさまじげになりたべかめれば」とあるから、この頃すでに兼家の町小路の女への熱愛はさめていたのであろう。「まゐり来まほしけれど、つつまじうてなむ。たしかに来とあらば、おつおづも」という兼家の文をきっかけに、久しぶりに歌の贈答が記され、「など、よろしいひなして、また見えたり」とあり、ここの「前裁の……」の記述が続くのである。「前裁の」以下が「また見えたり」とある日のことかどうかはよくわからない。

このあたり、二人の仲を取り結ぶものとして、和歌が有効な働きをしていることが目につく。縫物を突き返したのを薄情に思っただけか二十余日訪れなかつた後での訪問には、和歌の贈答によって道綱母の気持をさぐり、なだめ、「よろしいひな」すことが必要であった。帰ろうとして「さらでもありぬべき夜かな」と道綱母が思っている気配を察すると、兼家は「とまりぬべきことあらば」という。「こと」は「言」で、歌をいうのであろう。感動のあまり足が留まるような歌があるなら……と促す形なのである。道綱母の「いかにせむ」の歌はすねた形のものだが、ともかくそれによつて、兼家は「ひさかたの」の歌を詠んで出て行くのをやめたのである。続いて

の和歌の贈答は、野分の二日ばかり後の兼家の来訪の場面で、「一日の風は、いかにとも、例の人はとひてまし」と道綱母にいわれて、兼家は和歌で弁解するのだが、二回の和歌のやりとりの結果「これは、さもいふべしとや、人ことわりけむ」とあって、兼家は全面屈服するのである。次の十月ばかりの記事では、雨がひどく降

るのに、兼家は「それはしも、やんごとなきことあり」といつて出ようとする。道綱母はあきれかえつて、次のように詠む。

べき

結果は「といふに、強ひたる人あらむやは」と記されている。兼家が留まったのか出かけたのかは、よくわからない文である。「全講」と「抄」を除けば、出かけてしまったと解するのが普通だが、どちらにしたところで、道綱母のこういう口調には、歌の効用に対する絶対的ともいつてよい信頼が感じられる。私がこのように歌つて止めたのだから、普通なら出かけられるはずはないといつていいのである。このあたり、歌徳説話にも発展しておかしくないエピソードが続いているのである。そんな中で、「ももくさの」と兼家が詠みかけ、「みのあきを」と道綱母が応え、それでいて冷やかな、よそよそしい仲になってしまうのだろうか。また、冷やかになつたと述べられているとして、次の出て行こうとする兼家に対して、道綱母が、「さらでもありぬべき夜かな」と思う気配を感じさせてしまふとは、どういふことだろうか。

次に「つれなし」という語の意味についても考えてみた。

平安時代の「つれなし」という語の基本的な意味は、ある働きかけに対して（期待した）反応をまったく表わさない、あるいは、内心・内面の動揺や動きを表に表わさない、というように考えてよいであろう。「大日本国語辞典」に掲げられた「①表面何事もなげであるさま。表面に出さないさま。素知らぬさま」「②人の心をくもともせず、ひややかであるさま。情け知らずだ。無情だ」「③何

の変わりもみえないさま。何の影響も受けないさま。また転じて、何のへんてつもない。退屈である」「④思うにまかせないさま。意のごとくにならないさま」「⑤周囲の事情にかまわず、鈍感であるさま。厚顔であるさま」なども、③の「転じて」以下が平安時代の用法でなさそうだが、これを除けばここに述べた基本的意味で通せる。「かげろふの日記」の用例にしてもそうである。「かげろふの日記」には地の文には十六例の「つれなし」「つれもなし」が見られる。それらについて見てみよう。

・十月つごもりがたに、三夜しきりて見えぬ時あり。つれなうで、「しばしころみるほどに」など、気色あり。(P 135 136)

三夜統けて来ないにはそれだけの理由——道綱母は他の女との結婚を推測している——があるはずのだが、兼家は特別なことのあるような表情はまったく見せずに「あなたの気持をしばらく試している間に日が経つてね」などと平然というのである。次は、町小路の女の産産を兼家が知らせてきたあとの、

三四日ばかりありて、みづからいともつれなく見えたり。(P 145)

という文。道綱母の心を痛めさせるあれほどのことがありながら、ふだんとまったく変わらぬ態度で兼家はやってくるのである。次が今問題にしている部分。続いて、

・人はいとつれなう、「われや悪しき」など、うらもなう罪なきさまにもてないたれば……(P 150 151)

・かかるところをも、とりつくりかかはる人もなければ、いと悪しうのみなりゆく。これをつれなく出で入りするは、ことに

心細く思ふらむなど、深う思ひ寄らぬなめりなど… (P 183 184)

・「心に怠りはあれど、いとことしげきころにてなむ。夜さきりのせむに、いかならむ。恐しさに」などあり。「こち悪しきほどにて、えきこえず」とものして、思ひ絶えぬるに、つれなく見えたり。あさましと思ふに、うらもなくたはぶるれば、いとねたさに(中略)石木のごとして明かしつれば、つとめて、ものも言はで帰りぬ。

それより後、しひてつれなくて、「例の、ことわり。これ、としてかくして」などあるも、いと憎くて… (P 250 251)

など、兼家の主語の「つれなし」は多く似た用法で、これらの諸例では、兼家が訪れてきたり、縫物を依頼してきたりすること自体、道綱母には「つれなし」とうつるのである。兼家を主語とする「つれなし」はもう二例あつて、

・もし見たる気色もやと、した待たれけむかし。されど、つれなく、つごもりになりぬ (P 232)

・さべしとは、さきさきもほのめかしたれど、今日などもなくてやはとて、「きこえさすべきこと」と、ものしたれど、「つつしむことありてなむ」とて、つれもなければ… (P 348)

は、道綱母の呼びかけにもかかわらず、それに応じようとする気配を兼家がまったく見せないところに使われている。

道綱母を主語とする「つれなし」では、
・人々「なほあるやうあらむ。つれなくて気色を見よ」などいへば、 (P 233)

・…かの忌のところには、子産みたなりと人いふ。なほあらむよ

「かげろふの日記」解釈論—「返し、いと古めきたり」—例のつれなうなりぬ—

りは、あな憎とも聞き思ふべけれど、つれなうである。 (P 384 386)

は、自分の感情を押さえて平静を装う意で、

・かくおもておもてに、とさまかくさまに言ひなさるれど、わが心はつれなくなむありける。 (P 272)

・申の時ばかりにものせしを、火ともすほどになりけり。つれなくて動かねば… (P 284)

・…簾に手をかくれば、いとけうとけれど、聞きも入れぬやうにて「いたう更けぬらむを、例はさしもおぼえたまふ夜になむある」とつれなういへば… (P 367)

は、他からの働きかけに反応を示さない意で使われている。

・さて三日ばかりのほどに、「今日なむ」とて、夜さき見えたり。つねにしも、いかなる心の、え思ひあへずなりにたれば、われはつれなければ、人はた罪もなきやうにて、七八日のほどにぞわづかに通ひたる。 (P 296)

・今日ぞ、「これ逢ひて、つつしむことありてなむ」とある。めづらしげもなければ、「給はりぬ」などつれなうものしけり。 (P 324)

の二例は判断に迷う。「全集」は共に「そっけない」という訳語を用いている。激した、あるいは屈曲した感情を押さえ、平静を装い、ふるまう意の用法だと私には思える。

以上が「かげろふの日記」の地の文に用いられている「つれなし」の全用例である。「つれなし」の語義や「かげろふの日記」での用法を見る限りでは、問題の「つれなうなりぬ」で、二人の態度

が冷やかになった、よそよそしくなったと解するのは、非常に異例だということになる。二人が歌のやり取りをしている以上、兼家と道綱母とのどちらを主語にしたところで、働きかけに反応しない意に解釈するのはむずかしいだろう。

この前後の和歌の効用や下文の二人の親しみを考えれば、「つれなうなりぬ」の解釈は一つしかないだろう。「かたみに恨むるさまのこともあるべし」という二人が、和歌の贈答によって表面的には仲直りをしたと読めるのである。「つれなし」は、おたがいに完全に相手を納得し受け入れたわけではなく、心中のよもやもやしたものはなお存したであろうけれども、それを押さえ、平静を装いえたというのである。「例の」から訳してみれば、「いつものように、表面的にはおだやかな仲となった」とでもなるうか。「例の」とあるから、こうした妥協ないしは仲直りが、このころはよくあったというのであろう。ここに語法的にも前後関係からも無理な「よそよそしい」「冷やかだ」の訳語が充てられ、定説化しているのは、人にもあらぬはかない身の上を描いた作品という読みの倫理に左右されすぎているのではなからうか。

注1 蜻蛉日記の発想―冒頭部分の贈答歌について―(平安朝文学研究会編

「平安朝文学の諸問題」昭52 笠間書院 所載)

2 稻賀敬二 孝標女の初恋の人は「雫に濁る人」か(国語と国文学 昭43・12)

3 「蜻蛉日記形成論」昭50 笠間書院

4 たとえば、伊牟田経久 かげろふ日記上巻の表現と構成(国文学 言語と文芸四〇 昭40・5)

5 3に同じ。

6 木村正中 蜻蛉日記の主題と構造(明治大学 人文科学科紀要 第五冊 昭42・2)

7 「蜻蛉日記」と「和泉式部日記」―超絶的視点を中心に―(「全講和泉式部日記」追補 昭53版より収録 至文堂)

8 拙稿 「かげろふの日記」私注―町の小路の女をめぐる―(日本文学研究〈梅光女学院大学〉一七 昭56・11)